

1 研究主題

「音楽のよさを追求する子供の育成」

2 研究主題について

(1) 研究総論との関連

本校研究主題「ともに学び、学び抜く子供」とは、総論で述べられているとおり「困難な課題に対してあきらめずに向かい合い、試行錯誤しながら取り組んだり、協働して解決策を考えたりしてやり遂げようとする姿」である。その姿を実現するために本校研究副題に書かれている「非認知能力に注目した授業」を目指していく。

本校音楽科では、令和元年度より、「学びをつなぐ子供—教科等の本質に迫る授業を通して—」のもと、「音楽のよさを実感し、自ら音楽を味わう子供を育てる授業」を研究主題とし、音楽的な見方・考え方を働かせて、音楽科の本質に迫る授業をするための研究を進めてきた。研究を行う上で、いくつかの成果と課題が見られた。主な成果は、音楽的な見方・考え方を働かせて、聴き取ったこと（以下「知覚」とする）と感じ取ったこと（以下「感受」とする）の関わりに気付くことができた点である。一方課題としては、知覚と感受が関わり合っていることは知識として理解できたが、関連していることを生かしてよりよい表現につなげたり、曲全体を味わって聴くときに生かしたりすることが難しかった点である。

本校研究主題や前研究までの研究の課題を踏まえ、音楽科では「音楽のよさを追求する子供の育成」という研究主題を設定した。「音楽のよさを追求する」姿とは、よりよい表現を求めたり、曲全体を味わって聴いたりする姿である。その姿を目指すために、授業で扱う楽曲を聴いて感じたことを、楽曲の中の要素の働きをよりどころとして捉えるという知覚と感受の関連を実感する学習を大切にしていきたい。なぜならば、知覚と感受の関連を実感することで、「聴いてワクワクする感じがしたから、速度を速くしてみたい。」などこのように表現したいという思いや意図をもったり、「スキップしたくなるように聴こえたのは、タッカのリズムがたくさん使われているからだ。」など音楽の楽しさやよさなどを見だし、曲全体を味わって聴いたりするということにつながりやすくなると考えるからである。知覚・感受の関連を実感し、積み重ねていくことで、知識及び技能を得たり生かしたりできるようになり、さらに経験を重ねることで、表現や鑑賞の学習をする上で、選択肢の幅が広がる。選択肢の幅が広がることで、音楽表現を試行錯誤する過程で取捨選択できるようになり、自分にとっての音楽のよさをより追求しやすくなるのではないだろうか。

音楽科では、音楽に対して心が動き、表現したり鑑賞したりしたいと思うことを「意欲」、音楽的な見方・考え方を働かせながら、よりよい表現を求めたり、曲全体を味わって聴いたりすることを「粘り強さ」と考えた。

知覚・感受の関連を実感する機会をつくったり、「意欲」や「粘り強さ」に働きかけたりすることで、本校音楽科の研究主題「音楽のよさを追求する子供の育成」が図られるのではないかと捉えた。

（２）音楽科で考える「ともに学び、学び抜く子供」の姿について

協働して音楽を学習するよさを感じ、音楽的な見方・考え方を働かせながら、音楽のよさを追求する子供

本校音楽科が考える「ともに学ぶ」とは、「協働して音楽を学習するよさを感じる事」である。「協働して音楽の学習をするよさ」とは、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図りながら、友達と音楽表現をしたり、音楽を味わって聴いたりする楽しさなどをいう。音楽科の学習は、一人で音楽活動を行うこともあれば、集団で行うこともある。一人で音楽活動をするのも楽しいが、友達と一緒に音楽活動することも楽しいといった、音楽科の学びの特質¹を反映していると考えられる。また、感じ方や考え方の多様性を尊重する態度や、友達の演奏を聴いたり、友達の意見や考えを聞いたりして、学びを深めていくという互いのよさを生かして目標に向かっていくことも協働することのよさであるといえるだろう。

本校音楽科が考える「学び抜く子供」とは「音楽的な見方・考え方を働かせながら、音楽のよさを追求する子供」である。「音楽のよさを追求する」とは、「よりよい表現を求めたり、曲全体を味わって聴いたりすること」である。「よりよい表現」を求めていくためには、子供が思いや意図をもち、その思いや意図を実現するために表現方法を試行錯誤していくことが必要だと捉えている。「曲全体を味わって聴く」ためには、自分で曲や演奏のよさなどを見いだせるようにすることが必要だと考える。

そのためには、音楽の学習に対して粘り強く向き合うことが不可欠であり、粘り強く向き合うためのものとなるのが「意欲」だと考える。音楽科で考える「意欲」とは、「こんな感じの音楽にしてみたい。」という思いをもったり、「不思議な感じがするのはなぜだろう。」という疑問をもったりするなど、音楽に対して心が動き、表現したり鑑賞したりしたいと思うことである。その「意欲」がもととなって、どのように表現するか考えたり、不思議な感じがするのはなぜか音楽を聴いて考えたりするという「粘り強く」学習と向き合うことにつながる。「粘り強く」学習と向き合うためには、音楽的な見方・考え方を働かせることが必要であろう。本校の前研究で、音楽的な見方・考え方を働かせることにより、知覚と感受の関連を実感できたという成果があるため、今回の研究でも踏襲していく。音楽的な見方・考え方を働かせて、学習に向き合うことができるように、本研究においても手立てを講じていく。

音楽科の２年次までの成果として、他者との協働を通して、音楽活動に楽しく取り組んだり、他者の考えを聞いて納得したりする姿が見られた。また、他者の考えを聞いて、よりよい音楽をつくっていかうとする姿も見られた。更に、課題設定を工夫したことにより、子供たちから「やってみよう」という声を聞くことができ、意欲をもたせることにつながった。

一方課題として、子供たちが個々の思いや意図を表現するために、これまでの学習を生かして試行錯誤するという子供主体の授業を目指す必要があると感じた。そこで３年次では、音楽的な見方・考え方を働かせながら、子供たちが自分たちで音楽のよさを追究していけるようにしていきたい。

３ 研究内容 「ともに学び、学び抜く子供」を育成するための授業について

（１）３年次について

２年次の課題を踏まえ、３年次では子供が自分たちで試行錯誤しながら、音楽のよさを追求する姿を目指していきたい。そのためには、子供たちがこれまで学習したことを生かすことができ

¹ 友達と思いなどを共有するためのコミュニケーションが、言葉だけではなく、音や音楽を介して行われるということである。

るような題材構成を考えることが必要だと捉えている。

また、2年次では、一斉学習が中心だったため、仲間とそれぞれの考えを共有し、試行錯誤しながら考えを深めていく姿が見られず、活動が停滞してしまったように感じた。そこで、3年次は仲間との交流を通し、それぞれが考えを深めていけるような姿を目指していきたい。協働することで、一人では思いつかないような考えなどを生み出しやすくなり、学習したことを生かして音楽のよさを、更に追求しやすくなるのではないかと考えている。

（２）３年次の具体的な指導方法の工夫・手立てについて

① 子供の思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素の明確化

題材を通して、子供の思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素を明確化していく。そうすることで、音楽的な見方・考え方を働かせて、よりよい表現を求めたり、曲全体を味わって聴いたりするという「粘り強さ」に働きかけやすくなると考える。また、表現領域と鑑賞領域を関連させた指導がしやすくなり、子供たちもよりどころとすべき要素を生かして表現や鑑賞の学習を深めることができると考える。更に、思考・判断のよりどころとなる要素がどの子供も同じになる。よりどころとする要素が同じであれば、友達の意見や考えを参考に再考しやすくなるので、解決への糸口がつかみやすくなるであろう。2年次は、教師が設定した要素と実際の児童の姿にずれがあった。3年次では、教師が児童の姿を想定して、全員が思考・判断のよりどころとする要素を適切に選択するようにしていきたい。

② 協働して、学び合う場の工夫

本校音楽科が考える協働とは、友達と音楽を演奏する活動を通して、一人では味わえない音楽のよさや楽しさなどに気付いたり、それぞれの考えを共有することを通して、考えを深めたりする姿だと捉える。

協働して、学び合う場を工夫することで、音楽の楽しさを味わえるようにしていく。一人で音楽活動するだけでなく、友達と音を合わせたり、重ねたりするなど友達と一緒に音楽活動することで楽しさを感じさせたい。また、友達の表現を聴き合ったり、音楽から感じ取ったことや自分の聴き方などを伝え合ったりする場になるようにしていきたいと考えている。そうすることで、多様な表現や聴き方などを知ることができ、自分の表現や聴き方を深めたりすることにつながっていくと捉えている。さらに、音楽のよさを追求していくために、他者の考えを自分の表現や聴き方に生かしていけるようにしていく。他者との協働を通して、自分では思いつかないような新たな気付きを得られる場合がある。それが音楽のよさを追求していく糸口となると考えている。

③ ICTの活用

音楽科におけるICTの活用のよさとして、2つあると考えている。1つ目に、子供たちが自分たちの歌声や演奏を録音・録画できることである。それを見たり聴いたりして、自分の演奏を客観的に捉えて、よりよくするためにはどうしていけばいいかという思考を促すことができる。また、録音・録画したものをお互い見合うことができる。それが、友達の演奏のよさや魅力に気付くきっかけとなり、自分の演奏に生かしていやすくなるであろう。2つ目に、Padletなどのアプリを使うことで、それぞれが思考・判断・表現したことを共有することができ、学習を深めやすくなることにつながると考える。また、継続的な振り返りを通して自分の学びを自覚できるようにしていきたい。教師も子供の学習の様子を捉えやすくなり、指導に生かすことができると考えている。

（３）子供の姿の評価について

３年次では、学習場面において実際に現れた子供の姿の評価についても検討していく。音楽科では特に、「主体的に学習に取り組む態度」に関わって、「子供が意欲をもって粘り強く課題に向き合っているか」について、具体的な姿を想定して評価につなげていきたいと考えている。教師は主に観察によって評価を行うが、一単位時間で全ての子供の様子を見取ることには限界がある。そこで、（２）で示した３年次の研究の重点を年間の指導において計画的に実践することで、子供たちの主体的な学びを促していきたい。その結果、意欲や粘り強さが表情や発言、課題に取り組む姿勢に現れるのではないかと考える。

そのためには、（２）の手立て②で示したように、協働する場面と個で取り組む場面を効果的に授業に取り入れ、子供の様々な様子を観察できるような機会をつくっていく。また、（２）①で示した「思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素」を明確化することで、その要素を根拠に子供が表現を工夫している様子を教師が見取りやすくなると考える。このように、教師がポイントを絞って評価できるような工夫を具体化していきたい。

〈引用文献・参考文献〉

- 山下薫子編著(2017)『小学校 新学習指導要領 ポイント総整理 音楽』東洋館出版
宮下俊也編著(2017)『平成 29 年度改訂 小学校教育課程実践講座 音楽』ぎょうせい
文部科学省『平成 29 年度告示 小学校学習指導要領 音楽編』
山梨大学教育学部附属小学校 令和 3 年度研究紀要
教育芸術社(2020)『小学生のおんがく』